

《公開講演会記録》

紙幣にみる近現代の中国

通貨研究者（元重慶総領事） 富田昌宏

辛亥革命から現代に至る近現代中国の通貨の変遷をみると、波乱の時代の中で、きわめて多種多様な紙幣が発行され、流通した。そのような通貨の歴史の中から興味深いテーマを取り上げて、この国の近現代史を振り返ってみたい。

1、毛沢東の肖像

毛沢東は新中国成立当時の中国共産党中央委員会主席で中央政府主席であり、その後1976年に死去するまで最高指導者として党主席の地位にあった。しかし、新中国成立から50年間、人民幣銀行券には毛沢東の単独の肖像は描かれなかった。

じつは、新国家成立以前には毛沢東が描かれた紙幣があった。1935年1月、貴州省遵義で開催された中国共産党拡大

政治局会議（遵義会議）において、毛沢東は党の最高指導者としての地位を不動のものにしたが、それ以後、中国各地の革命政権の根拠地で発行された紙幣には毛沢東の肖像が描かれた。中国東部の華東解放区では1945年に「華中幣」と称する通貨が発行され、その銀行券には人民服姿の若



図1 華中銀行10元

き毛沢東の肖像が見られる。中国東北部では、1946年にソ連軍が撤退したあと、長城銀行、東北銀行など解放区の銀行によって毛沢東の肖像を描いた紙幣が多数発行された（図1、図2）。中国人民銀行は、新中国成立の前年、1948年12月に設立され、現在までに5版の人民幣銀行券を発行してきた。毛沢東



図2 長城銀行500元





図3 中華人民共和国成立50周年記念50元

の肖像が初めて券面に描かれたのは、1988年に発行された第4版の100元紙幣で、新中国建国の元老4人の1人として、周恩来、劉少奇、朱徳とともに横顔が描かれている。毛沢東、周恩来、朱徳は76年に死去。劉少奇は文革で67年に失脚、69年に死去した。

中華人民共和国は、1999年10月、成立50周年を迎え、初めて50元の記念紙幣を発行した(図3)。表面には毛沢東が天安門の楼閣上で建国の宣言を読み上げている有名な場面が描かれている。

そして、その10月からデザインを一新した100元を含む、新たな第5版のシリーズの発行が始まった。これら現行の1元から100元までの6種類の紙幣の表面右側には、いずれも同じ毛沢東の大きな肖像が初め



図4 第3版人民幣10元裏面

て単独で出現した。

このように1949年の新中国の成立から50年間、累次発行された銀行券に指導者毛沢東の肖像がみられなかったのは、毛沢東主席本人が望まなかったからであるといわれる。

1986年に発行された雑誌「中国錢幣」には、当時、紙幣のデザイン等に関わった関係者が、周恩来総理の死去10周年の節目に語った次のようなエピソードが掲載されている。

1955年3月、中国人民銀行は、新中国として初の本格的な通貨として、第2版の人民幣を発行したが、周恩来総理は発行される紙幣のデザインに大きな関心をもち、自ら指示を出していた。新紙幣のデザインについては、一

般国民から種々の意見が寄せられ、その中には、紙幣の主たる図柄として、毛沢東主席の肖像を登場させるべきであるという意見が多かったという。しかしその時には、すでに周恩来は毛沢東本人から、紙幣には描かれたくないとの意向を確認済みであったというのだ。

1966年から発行され始めた第3版のシリーズは、その後80年代まで長期に亘って発行されたので、中国に関わった多くの外国人にとっても親しみのある紙幣であるが、その最高額の10元券の裏面に長安街から天安門を斜めに見た図が描かれている。しかし、今も天安門の正面に掛けられている毛沢東の肖像画が見えない(図4)。

これも毛沢東主席の意向を受けた周恩来の指示が徹底していたことの表れであろう。

1976年、周恩来と毛沢東が相次いで死去した。そして上述のとおり、88年に発行された第4版の発行に際しては、最高額面の100元のモチーフとして、毛沢東が中国革命の指導者4人の1人として描かれ、さらに99年発行の第5版には、すべて毛沢東単独の肖像が描かれることになった。毛沢東は歴史上の指導者として、本人の意向とは無関係に紙幣に



図5 第4版人民幣100元



図6 現行の毛沢東100元

登場することになったのである(図5、図6)。

2、偽札の製造と流通

さて中国では、偽札の蔓延がたいへん深刻である。注意していないと、いつ偽札を受け取らされてしまうかわからない。大都市の商店の多くは、偽札検知器を備

の現象が日常的に起こっている(図7)。

—偽札横行の現状—

中国公安部の発表によれば、2009年の偽造通貨取り締まり行動(09行動)の結果、押収された偽札を中心とする偽造通貨の総額は11億6500万元(約152億円)に上った。

中国人民銀行が公表している2009

えていて、受け取った100元、50元など額面の大きな紙幣は必ず偽札検知器にかけて検査している。偽札を受け取った場合には、警察に届けなければならぬのだが、真券と代えてくれずに没収されてしまうので、中国では多くの場合、偽札と分かって

も使ってしまうという人が多く、「ババ抜き」

年末のマネーストックのうち現金通貨は3兆8247億元であったので、現金通貨に占める押収された偽造通貨の比率は0.03%であったことになる。

因みに日本では、2009年の1年間に押収された偽造通貨の総額は2225万円であったので、中国の偽造通貨の額は、日本の693倍に相当する。また、中国の現金通貨に占める偽造通貨の比率は、日本の1万倍余りであったことになる。ただし翌2010年に押収された偽札の総額は3億3800万元(約42億2500万円)で、前年比71%減となった。

1949年10月の中華人民共和国建国当時は、社会主義計画経済体制であった。その後、経済は急速に発展したが、基本的に閉鎖的で統制された経済体制であり、また食料品や生活物資が不足し、通貨の地位は低かった。

多くの生活必需品は配給制で、穀物については「糧票」、綿布については「布票」というように、用途指定の配給切符が配られ、まさに「金はあっても物が買えない」状況であった。その後、社会主義計画経済体制の下で、中国経済は曲折を経つつ発展を遂げるが、通貨に対する人々の信頼はあまり向上しなかったことが幸いしたか、また印刷機などの設備が



図7 偽札検知器

ほとんど国営企業に属していたせい、この時代は組織的な偽札の製造はほとんどなかったようである。

― 改革開放政策と偽札の出現 ―

その後、1978年12月の中国共産党第11期3中全会で、改革開放政策の導入が決定され、中国の対外経済交流が本格的に始まるとともに、中国国内において偽札など偽造通貨が出現するようになった。

1980年8月、中国の全国人民代表

大会（国会）常務委員会において、「广东省経済特区条例」が採択され、香港の北側の広東省深圳（シンセン）市に「深圳経済特区」が設立された。改革開放の実験場として、ここで経済発展、対外経済関係促進のための新しい試みが実施され、南に隣接する香港を通じて海外との経済交流が急速に発展した。その結果、米ドルや香港ドルの偽札が流入した。その背景には、経済特区においては、その他の地域と異なって外資企業に種々の優遇措置が与えられたばかりでなく、金融管理等も緩やかであったために、香港ドルが一般に流通し、米ドルも取引に使われていたという事情があった。

そのような状況の中で、1980年初めから1986年5月末までの間に、中国銀行深圳支店によって発見された偽札は、香港ドルが218万ドル、米ドルが8460ドルに上ったと報じられた。

同時に、中国の経済発展に伴って、中国元の偽札も香港で製造されて中国に持ち込まれるようになり、1982年5月、香港と深圳を中心として、中国で最初の大規模な人民幣銀行券の偽造、密売グループのいっせいで摘発が行われた。この時には、中国と香港で押収された未完成品を含む偽10元札は合計111万7000元

以上に上った。

その後も香港から中国への中国元の偽札の密輸は拡大を続け、1980年から85年の間に香港から流入した元の偽札は67000万元に増大したと推計された。

その後、今度は台湾における中国元偽札の製造が拡大する。1993年頃から大陸と台湾との間の交流が活発化したことよって、台湾からの高品質の偽札の密輸の拡大が促進されたことが注目される。

94年4月から6月までの3カ月間に、台湾から中国南部の広東省汕頭に偽100元札が束で32億余枚、3200億元余が密輸入され、そのうち14億枚、1400億元が実際に使われて社会に流入したという。これに先立つ92年から94年までの間に台湾から大陸に流入した中国元の偽札は数10億元程度だったと推計されている。

台湾では中国人民銀行券は有効な価値を持つ通貨や証券ではなかったため、当初はその偽造は罪にならず、実際、1991年には台湾の高雄地方裁判所で、中国元の偽造者に無罪の判決が言い渡された例がある。

後には台湾でも中国通貨の偽造は犯罪となったが、92年から95年の間に台湾で

検挙された中国通貨の偽造グループは10以上、押収された偽札は1億元以上に増大した。

新しい世紀になると、偽札の製造拠点 は広東省へと移った。2002年8月の報道によれば、それまでの十数年間の中国の偽札犯罪の発生地は90パーセントが広東省であったと、同省公安厅の関係者が認めたという。広東省東部の潮州、汕頭（スワトウ）がその製造拠点、南方都市部の広州、深圳が集散地になっているということだ。

上述のように、2009年末の中国における偽造通貨の摘発総額は1億6500万円で、米ドルで1億7060万ドル相当であった。他方、2006年に米国防務省検察局が関係各国と連携して世界的に偽造米ドルの摘発を実施したところ、市場に出る前に押収したものが5300万ドル、市場において摘発したものが6500万ドル分あり、全世界で摘発された米ドルの偽札は、合計1億1800万ドルであったと公表されている。

1900年代に世界で製造され、流通していた中国元の偽札の数量がすでに米ドルを超えていたとの推計があったが、今日では中国元の偽札が、その金額においても、世界の主要な準備通貨である米



図8 石版、木版の偽札

ドルを超えたことは注目される。

— 偽造防止技術 —

中国で偽札が組織的に製造されるのは改革開放政策が実施されて以降であるが、個別の偽札の製造と行使そのものは建国当初からあった。中国政府の関係機関の資料によれば、偽札作成の方法も多様で、手書きの原始的なものから、写真による

複製、カラーコピーのもの等様々なものが出現した（図8）。

現行の中国人民銀行券は2005年8月から発行されているシリーズで、1999年に発行された第5版の銀行券をベースとして、新たな偽造防止技術を導入するとともに、図柄にも細かい修正が加えられている。

主な偽造防止技術としては、透かし、セキュリティ・スレッド（安全主線）、見る角度によって変化する潜像模様、マイクロ文字、インクが盛り上がった凹版印刷等が施されている。中国人民銀行関係者によると、現在、世界の紙幣に施されている偽造防止技術は55種類あり、そのうち中国の人民銀行券には29種類が使われているという。

そして、世界で最も偽造防止技術が高い紙幣は、シンガポール・ドル、スイス・フラン、オーストリア・シリングであり、中国の50元、100元は、これらの紙幣に近いレベルであるという。

— 罰則 —

中国ではまた、通貨偽造防止のための法整備も進められてきた。1995年に全国人民代表大会常務委員会によって「金融秩序を破壊する犯罪の処罰に関す

る決定」が採択され、「中華人民共和民主席令」が施行された。それに極めて詳細に偽造通貨犯罪に関する刑罰が規定されており、偽造への刑罰は重くなっている。その要点は次のとおり。

「通貨偽造は3年以上10年以下の刑とするが、偽造グループの首領、金額が特に大きい場合は、無期刑、死刑、財産の没収を科す」、「偽造通貨を販売、購入、知りながら輸送した者は、巨額の場合、3年以上10年以下の刑と併せて5万元から50万元の罰金を科す。特別巨額の場合、10年から無期の刑を課し併せて財産を没収する」、「銀行等の職員で偽造通貨を購入、または職権を利用して偽造通貨を入手した者は、金額が巨額もしくは事情が深刻な場合、10年以上無期までの刑を課し併せて財産を没収する」

中国では麻薬犯罪に対する刑罰が重いことは報道によってよく知られた事実であり、50グラム以上のヘロインの製造や密輸の首謀者が死刑判決を受けて即日処刑された例も多い。しかし偽札を製造した者の最高刑が死刑や無期刑であるという事は、一般の日本人としては想



図9 鄧小平を描いた実在しない500元

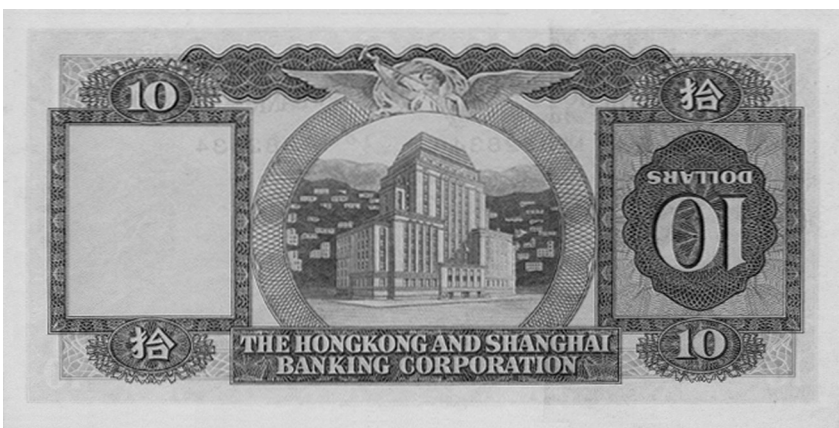


図10 香港上海銀行10ドル裏面

国で実際には存在しないはずの紙幣が出現したことがある。これらの紙幣は行使する目的で作成されたものではないと思われるが、これも一種の偽札である。中国の現行紙幣は最高額面が1000元であるが、2004年ころ、改革開放の旗手であった鄧小平元副総理の肖像が描かれた500元札の画像がネット上に出現したのである（図9）。

像を絶する重刑の感がある。中国における通貨偽造の深刻さと、政府当局の社会不安に対する警戒の強さを感じられる。

— 実在しない紙幣 —

次は趣のまったく違う話であるが、中

員が、2004年の会議で、中国ではすでに500元札発行の機が熟しているとして、500元以上の高額紙幣の発行を提案したことがある。

この提案は、その後も繰り返し行われており、発券銀行である中国人民銀行は

繰り返しその発行の可能性を否定している。カード決済が普及しつつある中で、その必要性を否定する世論も強い。

他方、1990年代には、中国の貨幣市場で、香港ドルの偽のエラー紙幣が出回ったことがある。これは、1997年版の香港上海銀行発行の10香港ドル札で、全体に極めて精巧にできており、本物そっくりであるが、裏面右側の「10 DOLLARS」と記された部分だけが上下逆さまに印刷されている。しかし、この紙幣の裏面の図柄は全体が一つの版になっており、組み合わせたものではないので、このようなエラーは存在しないはずである。これは、マニアや投機家を狙った偽札ということになった(図10)。

3、人民幣にまつわる話

― 記念銀行券 ―

2008年8月の北京オリンピックを記念して、前月7月、中国人民銀行が10元の記念銀行券を発行した。前月の表面の主たるモチーフは、「鳥の巣」競技場であった。

このほか、中国の主権下にある香港とマカオでも、中国銀行がそれぞれの通貨による別の記念銀行券を発行した。これ

も北京オリンピックに関連する特徴的な出来事といえることができる。

中国人民銀行が発行した記念銀行券は、全体の色調は緑色で、特に目立った感じではない。サイズは、現行の50元券とほぼ同じで、72ミリ×148・5ミリである(図11)。

表面中央には、「鳥の巣」競技場が大きく描かれ、その左側には、同じ「鳥の巣」の透かし。中央上部には赤色の北京オリ



図11 北京オリンピック記念10元

ンピックのロゴ。これは、北京の「京」の字をランナーの形にした図案の下に「Beijing 2008」の文字と五輪を組み合わせたもので、オリンピック関係の印刷物などにも多く見られたものである。

中国では、従来から重要な国のイベントなどがあると、金貨や銀貨を含む記念硬貨が発行されることが多く、北京オリンピックに際しても、記念硬貨セットが3種類発行された。しかし、記念銀行券が発行された例は少なく、これは1999年の中華人民共和国成立50周年、2000年のミレニアム(2000年紀)に次いで3回目であった。

そして、その発行をめぐる状況も極めて特徴的であった。全国各地の銀行で一斉に発行され、誰でも10元持って行けば、1人1枚交換できた。その発行は広く知られ、前評判が高かったため、当日各銀行の前には交換を求める人々の長蛇の列ができた。そして2日後には、一部のネットサイトに、その市場価値が額面の百倍の1000元に跳ね上がったという情報が流れた。その後、中国各地の貨幣店などでは、オリンピック記念銀行券1枚を解説付きのきれいなカバーに入れたものが1500元から2000元の高値で売り出されたと報じられた。

ところで、その発行枚数は600万枚であると発表されている。他方、中国最初の記念銀行券であった、新中国成立50周年記念50元は6000万枚、その次のミレニアム記念1000元は1000万枚

発行された。つまり、オリンピック記念銀行券の発行枚数は、50周年記念銀行券の10分の1、ミレニアム記念銀行券の6割と、発行数量が大幅に抑制されていたわけである。

中国の通貨当局が発行数量をこのように大幅に抑制したのは、その希少性と付加価値を高めて、投機熱をおおる手法であったことは否めない。これもまた、北京オリンピックにまつわる特色ある出来事であった。

―「圓」と「元」―

中国の通貨の名称は「元」と呼ばれており、日本では「人民幣」のことを「人民幣」と呼んでいる。他方、中国の紙幣には通貨単位が「圓」と記されている。

一方、硬貨を見ると、かつては1元硬貨には「壹圓」と記されていたのが、1992年以降は「1元」となっている。正式な通貨の名称はどちらなのか。

中国人民銀行法（1995年に全人代で成立、2003年修正）の第17条には「人民幣の単位は元、人民幣の補助貨単位は角、分とする」と規定されている。

すなわち中国の正式な通貨の名称は、「元」であり、紙幣の「圓」の表記は、日本で小切手などに数字を「壹」、「伍」、

「拾」などと表記するのと同じであると考えられる。台湾の場合は、一般には「元」が使われるが、正式な名称は「圓」であり、銀行券、硬貨の表記はすべて「圓」である。

「圓」の起源は清の時代に輸入されたメキシコなどの「銀圓」であり、日本の通貨単位の「円」も「洋銀」と呼ばれた外国銀貨の形状から来ているので起源は同じである。

4、非正規通貨

広大な国土と世界最多の人口を擁し、急速な発展を続ける中国は、国内に多様な経済状況の地域を抱えるとともに、国際的には広範な地域の国々との間で多様な関係を築いてきた。そして中国では、内外の様々な要因によって、正規の通貨以外に、種々の特定の目的をもった事実上の通貨が発行されてきた。

―外貨兌換券―

米ドルなど世界の主要通貨は、それぞれの国内における交易の媒体であるとともに、外国においては外貨準備として所有されている。他方、新興国を含む多数の国では、自国通貨の信認が低いため、



図12 外貨兌換券100元

国内での外貨の取り扱いは、問題をかかえている。

新興の大国である中国では、かつて市場経済が発展し、対外経済関係が拡大する中で、外貨の取り扱いは、ツールのとして外貨兌換券が導入された（図12）。

同様の紙幣は、かつてソ連、東欧諸国、北朝鮮、キューバなどいくつかの社会主義国で発行されていた。

中国の外貨兌換券は人民幣と同じ元を単位としたが、他の国では、米ドルを単位としたものが多くみられた。

中国では、改革開放政策が開始された直後の1980年から93年まで、中国銀

行によって外貨の価値を代表する証券といわれる外貨兌換券 (Foreign Exchange Certificate) が発行され、事実上、中国在留する外国人のための通貨となった。

外貨兌換券は、裏面には中国語と英語の説明があり、文字ばかりである。「本券の元は人民幣と等価である」、「本券は中国国内の指定された範囲でのみ使用できる。失っても紛失届けは出せない」と記されている。

「紛失届けは出せない」の意味は、形式上証券の形をとっていることから、普通の証券のように紛失届けを出して無効にすることで、損失を防ぐことはできないということである。

外国人用の通貨であった外貨兌換券は、中国人の間で「貴族の貨幣」と呼ばれ、大変人気があった。外国製品や高級な商品が買え、外貨への交換もできる兌換券が、公式には銀行券と等価とされていたためである。

多くの中国人が外貨兌換券を求めた結果、闇取引が横行した。1989年には外国為替管理局が「外貨兌換に関する規定」を発表し、外貨兌換券に対する管理が強化された。中国政府は2000年を目標に、中国元を外貨交換性の

ある通貨にする方針を決め、1993年12月29日夜の中国中央テレビのニュースで、2004年元日から元レートの1本化等金融制度改革を実施するとともに、外貨兌換券の発行を停止する旨報道した。外貨兌換券は、1995年6月末をもって廃止された。外貨兌換券は80年から13年間で約20億元分が発行されたという。しかし、93年12月の中国元通貨の発行総額は5864億7000万元であったので、通貨全体に占める比率は0・34%と微々たるものであった。

5、内戦時代の多様な紙幣

— 新疆とチベット —

新疆は清朝の時代から中国内地とのつながりが強かったが、西部のウイグル族



図13 新疆省官票100文

地域も大きく、多様な通貨が発行されたので、ユニークな紙幣が多くみられた (図13)。

銀両、紅錢 (赤色) を帯びた銅銭が流通し、政府機関の発行した「官票」には紅錢との兌換が明記されていた。商業銀行発行の孫文の肖像入りの銀行券の多くは内地と同じようなデザインであったが、裏面に一部ウイグル文字の表記がある。

カシユガルとホータンにあったウイグル族の東トルキスタン・イスラム共和国政府の通貨は紙幣と布幣があり、ウイグル文字のみの表記の紙幣やユニークなデザインの布貨幣がある。(図14)

チベットは1933年に独立宣言した。18世紀から銀貨を発行し、1912年頃

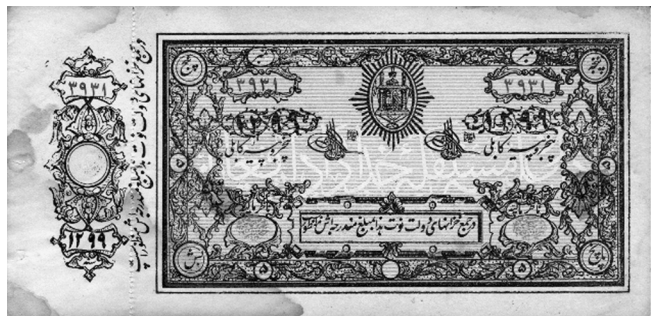


図14 東トルキスタン・イスラム共和国1両

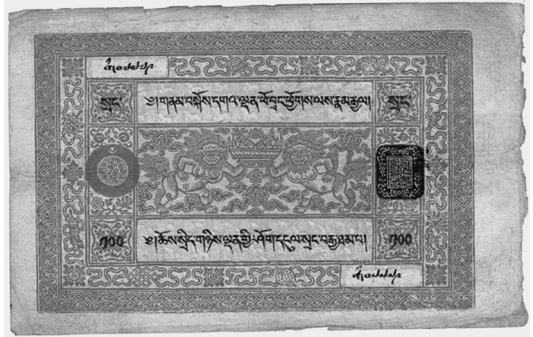


図15 チベット100サンク

べて獅子がデザインされており、チベット文字のみの表記である(図15)。1954年、中国軍によるチベット動乱平定で中国の支配下に入った。1959年、チベット通貨は回収され、人民幣に切り替えられた。

—ソ連軍の軍票—

第2次世界大戦末期に中国東北部、当時の満州国において、ソ連赤軍によって発行され、ごく短期間使用された軍票は異色のものではあった。(図16)

1945年8月、ソ連は日ソ中立条約を破棄し、日本に宣戦布告して満州国に

から政府紙幣が流通した。1931年より、サンクを単位とする大型紙幣を発行した。黄色や青の鮮やかな色彩の印刷で、す

侵攻した。ソ連軍はその支配地域において、満州国通貨を回収し軍票を発行した。それは、表裏ともオフセット2色刷りの簡素なもので、1、5、10、50元の4種類の額面のものがあり、すべて中国語で表記されている。表面には「ソ連赤軍司令部」、「〇圓」、「すべての支払いに使用すべし」、裏面には「小切手の贋造は戦時法で処罰する」と記されている。この規定から、この軍票は法的には小切手であったことが分かる。



図16 ソ連軍票100元

この軍票は、中国で発行され、使用の対象が中国人であるので中国語で表記されているこ

とはわかるが、ソ連の軍が発行する通貨であるにもかかわらず、ロシア語がまったく記されていないことが不思議である。国の機関である軍の発行する軍票は、

権威を有するべき通貨であり、海外の占領地等で発行する場合も、当該国の公用語で発券機関名や額面が明記されるのが普通である。

結局、ソ連赤軍は7カ月後に撤退し、軍票は姿を消した。このソ連赤軍の軍票にはもう一つ注目される点があった。それはソ連赤軍の撤退後、流通していた軍票は、中国国民政府の東北流通券に交換され、日本軍が発行した軍票のように紙屑にはならなかったことである。そして旧満州の通貨に関して注目すべきことは、1945年の満州帝国崩壊後も満州通貨がソ連軍票や東北流通券よりも高い信用を保ち、47年には東北流通券と等価で交換されたことである。

(7月30日・公開フォーラム)

講師略歴(とみた まさひろ)

- 1947年 大阪市生まれ
- 1970年 神戸市外国語大学中国語科卒業 外務省入省
- 中国各地に在勤
- 重慶総領事
- 2005年 外交史料館長
- 2009年 著書『紙幣が語る戦後世界』『紙幣の博物館』『お金が語る現代中国の歴史』